



北海道バスケットボール協会
指導者育成専門委員会
2010/04/5(月)

タクティクス (HBA指導者育成専門委員会ブログ)

NO. 69

「北海道ジュニア・オールスター大会」

北海道ジュニア・バスケットボール連盟
会長 幸丸 政実

当大会の雑感を述べる前に全国ジュニア・オールスター大会で北海道チームは今年も好成績を上げたことを報告いたします。低迷を続けていた女子が先ずは目標のベスト8まで勝ち上がり、全国的にも下馬評が高い男子は期待にたがわず今年も最終日に勝ち残り3位という快挙を上げてくれました。これで4年連続の上位入賞です。これらの結果はたまたまの偶然やまぐれで起こりうるものではなく、われわれジュニア連盟が取り組んできた成果の現れであると自負いたします。全国大会の報告はいずれスタッフの皆さんにいただくことになっていますので、今回の北海道ジュニア・オールスター大会について雑感を申し述べたいと思います。

「ファンダメンタルの技術が全道的に浸透」

近年特に目につくのは子供たちのボールハンドリングに対するスキルが著しく向上していると云う印象を受けます。ドリブルはもちろんのことパスの技術も非常に優れたものがあります。また、足さばきにおいても体のバランスを崩さないピボットフットの使い方など激しいバスケットボール、早いバスケットボールに対応した実戦向きの個人技術の向上がみてとれます。

ちょっと前までは、北海道を代表するジュニア・オールスターに選ばれた選手のクリニックでシェービング・ドリルをこなせる選手がほとんどいなかったことから考えると眼を見張る進歩といえます。根底には中学校の指導者の皆さんが積極的にJBA公認コーチの資格を取得した上での指導に着手し始めていること、ジャパン・オリジナルバスケットボールの概念を掌握しつつあることなど、指導カリキュラムに沿った指導が浸透し始めている表れであると思います。

私をはじめとして一昔前の指導者は自分がプレーヤーとして練習していたバスケットボールを思い出しながら選手に練習を押しつけていたという感があります。近代バスケットボールは技術や指導法がどんどん様変わりしルールの変更と相まって、スピード化しています。時々懐かしく観るNBAのマイケル・ジョーダンのプレーですら何か物

足りない感じがするのは私だけではありますまい。

「新人戦の実力がそのまま反映した大会だった」

今回の2年生の大会を見て感じたことは、新人戦の南北大会の結果がそのまま反映していることでした。新人戦の決勝大会では男子1位（札幌）位厚別北中学校、2位（旭川）愛宕中学校、3位（石狩）江別第二中学校、4位（旭川）北門中学校、女子は1位（旭川）神居東中学校、2位（帯広）帯広第一中学校、3位（北空知）美唄中学校、4位（札幌）北星中学校となっていて男子女子ともに旭川地区の活躍が目立ちました。

それがそのまま今大会にも表れていて女子は旭川が優勝し2位には北地区の釧路が食い込みました。今年の新人戦で女子は北大会勢が強かったことを証明しています。男子も新人戦の結果と同じく1位札幌、2位旭川、3位石狩で新人戦の結果と同じ順位になりました。このことは個々の学校の指導と地域の指導がほぼ同じレベルで指導されていることの証でありましょう。更に言うならば、全国のオールスターに選ばれた南北からの選抜者数は男子12名中9名が札幌、旭川1名、帯広1名、石狩1名という分布で、札幌の男子は9名も抜かれていて今大会で優勝すると云うことは底辺の広がりの手応えを感じます。

一方女子の全国オールスター選手は旭川3名、帯広3名、室蘭2名、札幌3名、石狩1名という分布で、旭川は主力選手を抜かれても残された選手層が厚かったこと、帯広は選手層が手薄になったことを表しています。特に全国オールスターのベンチ経験があり、新人大会で神居東中学校を優勝に導いた高島監督の采配は玄人好みの素晴らしいものでした。

短期間で、集めた選手に何を指導すればまとまったチームとして組み立てることができるのかというしっかりした理念がありました。2位になった釧路の選手について私は運動能力が全道一だと思えます。現在はまだ粗削りなところがあるのでそれが修正されれば中体連では面白いチームとしてデビューしそうです。

男子に限って言えば技術は持っているけれども戦術が分かっていない選手が多い。もっとわかりやすく言えば、ドリブルは上手いけれど使い方が間違っている。ドリブルはボールを運ぶため、ディフェンスを抜くため、時間を稼ぐため、など自分のチームを有利な立場に置くためにするものですが、ともすればドリブルをして不利な立場に自分から飛び込んでいく選手が多いのには驚かされます。指導者の適切な指導が必要とされるどころです。

「レベルアップは我々の気がつかないところで行われている」

今回非常に驚いたのはプログラムが完売したことです。普段ですともったいないくらい余ってしまうのに売れた原因は何かを考えました。プログラムで内容を変えたところと云えば選手の出身ミニバスチームを入れたことと、オフィシャルなどを手伝って大会を支えてくれる中学校の生徒の皆さんの名前を漏らさず載せたことです。プログラムが

売れると云うことはバスケットボールに対する関心度が高まると云うことであって、それがバスケットボールを理解してくれる層として厚みを増し、選手を快く部活動に送り出してくれる環境につながっていくと思います。プログラムに印刷する活字を増やすことは担当者にとって面倒なことでもありますが、回りまわって理解者が増えレベルアップにつながることを信じて私たちは仕事をしています。

「指導者は心を教える」

いつも説教が長く、叱られてばかりいる選手がいやいや練習に出かける環境では保護者が指導者に不信感を持ちこそすれ、信頼すべくもなくバスケットボールを積極的に応援してくれる層として期待できません。勝つための技術を教えても、選手が自ら勝ちたいと思う心を教えていない指導者が多いのではないのでしょうか。指導者自身が勝ちたくて独りよがりの指導している人を良く見かけますが、選手の勝ちたいと云う心を育てずにいくら指導しても空回りします。「馬に水を飲ませたいと思った時、すぐに水飲み場につれていってもだめだ。のどの渇きを見計らって連れて行け」という諺があります。

そういう意味では今回の旧称「学年別大会」はのどが渇いた選手が水（コーチの指導）を求めて集まっただけにコーチの指示を水取り紙に水が浸み込むがごとく吸収してくれたに違いありません。勝敗はともかく大会で見せた選手の満足そうな笑顔がそれを物語っていました。

H B A（北海道バスケットボール協会）指導者育成専門委員会